

ホトトギス

八月号



ホトトギス
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十七年八月一日発行(第百八卷第八号)

俳句随想

二百七十八

汀子

東海ホトトギス同人会の私の特選句の中に次のような素晴らしい句があった。「遅桜それも散りつゝありにけり」見事な花鳥諷詠の句である。勿論私は特選に選んだ。東海ホトトギス同人会は伊賀上野（今は伊賀市となつた）のホテルで開催された。私は車を運転して大阪を抜け西名阪を通り東名阪へ到る伊賀路を通つて行つた。ぐんぐん山が深くなり、遅桜に彩られた見事な山路が続いた。それは期待していなかつたこともあつて感動の連続であつた。そして先の掲句に出合つた。

句会が済んだあと四五人が寄つてひそひそ話をしている。耳に入ってくる言葉に類句というのが聞こえたのでその一人に尋ねた。

「先生、あの遅桜の句はもう前にある句ですよ」私は彼等に言った。「発表されたものを見るまでは軽々しく言わないで下さい。同じ句ならば、後から作つた人が自分の句帳にだけとどめておけばいいのです」私は家に帰つてすぐ書庫に入つて探し出した。「残花ありそれも散りつゝ迎へくれ」という句があつたが、この句に対して掲句を類句とする訳にはいかない。作者の作つた立場がぜんぜん違うからである。

旬日記 汀子

平成十六年八月一日 関西野分会

願ひごとありさうでなき流れ星
台風の端の雲抜けて着陸す
朝顔に日差の強き一日かな
八月一日 下甸句会

忘れものしさうな日なり落し文
風荒れし庭鎮もりぬ夜の秋
岳麓の旅の近づく星月夜
拾ふより開けるさだめの落し文
嵐去りたるは昨日よ夜の秋

八月二日 ロイヤル俳壇

八月の旅の近づく花さびた
蜘蛛を聞きしとも聞かざりしとも
雨止んで風の旅路よ花さびた
八月の蝦夷は季節を急ぎをり
八月の星空仰ぐ誘ひかな

八月七日 時雨・夏潮合同稽古会

立秋といふ岳麓の旅路かな
席決めてやうやく山の新涼に
山の風四方より抱き避暑の荘

立秋の朝の間の富士すでになし
雷ありしばかりに着きぬ山の荘
第二句会

遠ざかる雷雨に昏れてぬし山湖
稲妻や忘れしやうに山のあり
夜の帳稲妻隠し果せざる
山雨急雷鳴も又去来して
八月八日 第三句会

同じ富士見せてはくれぬ霧の朝
皆朝の日を受け秋の富士を見る
赤富士の片鱗を見て足らへしと
秋の蟬さへも名残を惜む荘
八月十日 大阪倶楽部

旅にして近づく夜空星月夜
さういへば残暑の旅となりけり
稲妻の玻璃の間遠となりけり
花水にも移ろへる刻のあり
残暑にも配慮の趣向卓上に

訃報又届く朝の残暑かな
八月十日 綿業倶楽部

桐一葉又桐一葉旅路かな
岳麓に見し盆の月満ちてをり
盆の月満ちくる頃の旅仕度
八月十一日 清交社
桐一葉大きな風の地にまろぶ

鳴き出して法師蟬とはそれらしく
桐一葉落ちてとどまる先のあり
週末は子等と過ごさん法師蟬
残暑には負けず稿債には負けて
八月十七日 有恒クラブ

旅疲れ解く新涼の朝かな
文月の稿債に立ち向ひけり
新涼の朝の雨音聞く目覚め
流れ星見えぬ夜空を仰ぎけり
八月十七日 無名会

沢山の硯の一つだけ洗ふ
ともかくもいつもの硯だけ洗ふ
この雨の秋めくことのたちまちに
週末の旅路秋めく仕度かな
旅仕度より秋めいてをりしこと

洗ひたるばかりの硯墨磨りて
岳麓の秋めく荘を去り難く
八月二十一日 日本伝統俳句協会全国俳句大会

石狩の大地駆け抜け秋驟雨
玫瑰の実よ海の色の雲の色
八月二十九日 野分会

朝顔の終の蕾と又思ふ
流星の消える瞬時に残るもの
消えしよりそこに流星ありしこと
旅終へし心の余白流れ星

廣太郎句帳

廣太郎

平成十六年八月二日 俊英句会

夏瘦もせずに銀座を徘徊す

八月四日 一水会

アスファルト晩夏の風に蕩けをり
初茄子歯ざはり嫌ふ漢かな
水打つて祇園の路地の出来上る

八月五日 蕉心会

炎天を来れば芭蕉の視線あり
船音の晩夏の風に吸はれゆく
蟬の声乾ききつたる地球かな
暑いかな暑いかなもう暑いかな
ビル一つ伸びゆく先の夕立雲
波といふ晩夏の白さありにけり
火星まで行けさうな遊船であり

パナマ帽作務衣ファッションモデルめき
八月七日 伝統俳句協会関東支部大会

狛江より佳人来りて秋立ちぬ
冷房を抱へ込んだる漢かな
都心てふ残暑極むる大地かな
一生を秋蟬として高鳴ける

八月十二日 土筆会

秋立つといふ言の葉の重かりし
流星に月は黙してをりにけり
流星に空固まつてをりにけり
芭蕉林葉先に力ありにけり
日本の臍で踊つてをりにけり

八月十七日 草木瓜会

蓼の花キャッチボールの上手な子
多摩川を越えても東京蓼の花
俯瞰して平家滅びし島の秋
窓の秋夕日の粒を招き入れ
八月十九日 登高会
大花火君の唇すぐそこに

丸ビルの先より降り来初嵐
大花火一つは君の為に咲く

葦の花羽音宿して暮れにけり
葦の花風一尺の高さかな
遠花火音は余韻となりて着く
八月二十二日 伝統俳句協会全国大会

八月二十四日 若水会

稲妻に石狩河口威を正す
台風に子等休校を喜べり
西瓜食む頬が躍つてをりにけり
台風に鍛へられたる都心かな
新丸の内ビル閉鎖秋の蟬
台風を近づけてあるオゾン層

八月二十五日 目黒学園句会

新涼の足踏みをし都心かな
新涼や阿波伊予讚岐駆け抜けて
朝顔の髪に朝日の届きけり
八月三十一日 夢三忌前夜句会
爽やかにマーチ奏でしオルゴール

雑詠

廣太郎 選

教皇の御掌のあたたかかりしこと 神戸 千原叡子
 散る花のひとひら毎の神仏 同 同
 みよし野の花掬はむとひしやく星 同 長山あや
 水のごと覚めゆく空や朝桜 同 同
 落花舞ふこの世の重さなきやうに 同 同
 近づきし富士も望めぬ霾の空 京都 安原 葉
 ものの芽を踏みてそ知らぬ顔の人 同 同
 恋猫のしつかり曲りゆきし路地 同 同
 朝日まだ当らぬ谷の花の色 榎原 稲岡 長
 日射し来しところに落花始まりぬ 同 同
 とは言うて花にも別れねばならず 同 同
 連れ立ちて二歳児もまた花人に 横浜 高浜礼子
 花吹雪浴び父と子の肩ぐるま 同 同
 ベビーカー三輪車あり花筵 同 同
 霞して一山塚のごとくなり 八代 山下しげ人
 闢へるごとと観潮の渦と渦 同 同
 花の下たましひのみの吾となり 同 同

花人の重さで沈みさうな山 群馬 木暮陶句郎
 夜は夜の花衣着て古城址へ 同 同
 眠りたき花照明が突き上ぐる 同 同
 春風となりて虚空をかけめぐる 明石 中杉隆世
 翼あるものを呼び入れ春の川 同 同
 春の闇含み笑ひをしてゐたる 同 同
 思ひ立ち上野の花に途中下車 福岡 松尾緑富
 花見人動物園は素通りに 同 同
 旅疲さら上野の花疲 同 同
 仔馬跳ね牧の太陽跳ねてぬし 福山 竹下陶子
 ハードルを跳び薫風を跳びにけり 同 同
 代を搔くとは水を押し泥を押す 同 同
 草遍路とは土に寝て石に寝て 宇治 西村やすし
 野宿して風のはざまをゆく遍路 同 同
 過去背負ひ未来を求め行く遍路 同 同
 波打てる嵯峨の夜空や御松明 神戸 山田弘子
 雛さまの声なき声と遊びけり 同 同
 啓蟄や開きたる書は知に満てる 同 同
 躊躇はず鳥叢雲に入りにつけり 吹田 宮崎 正
 比良八講御練の座主の杖確と 同 同
 露地小路祠の在す京の春 同 同
 春眠の臉重たく醒めてをり 鎌倉 荻江寿友
 隣り合ふ木々の芽吹くを競ふかに 同 同
 春の雪土に届かぬうちに消え 同 同

雑詠句評（七月号より）

芳子・中正・静龍
青虎・明倫・葉
美奇・保佳・忠彦
恵明・千鶴子・廣太郎

一年の俳諧つづる日記買ふ 京都 粟津松彩子

松彩子さんは、「ホトトギス」の語り部とも、名披講子としても名を残された。その日迄、お元氣であつたのに、この二月、忽然としてこの世を去られた。丁度一週間前に、五十四年間続いて来た十四人会が、南禅寺であり、大変健啖に、又名句を詠まれたのが最後となつた。私も五十五年以上の長いお付き合いであつた。記憶力抜群で、殊に虚子に心酔され、そのお句は殆ど立板に水の如く、滔々と詠まれ、数多くの名句を教えて頂いた。この句の「日記買ふ」には、今年も又、この一年の俳諧を綴ろうという意気込みが窺える。併しこの日記を綴ることなく、又この句が、廣太郎先生選の上位に載り、そして私の句評も読んで頂けず、急逝されたことは、返すがえすも残念な事に思う。謹んで松彩子様の御冥福をお祈り申し上げます。（芳子）

何時までもお元氣でおられると思つた矢先の急逝であり、誰も

が驚き悲しんだ平成十七年二月十八日であつた。最後まで病氣もされず、御本人が一番驚いているのではないかとさえ思つてしまふ。今年も例年通り日記を買われたのであろう。明るい季題の姿が何か重々しく感じられる。（廣太郎）

鷹鳩と化し獺らしきものを見る 八尾 岩垣子鹿

「鷹鳩となる」とは楽しい季題で、童話的な物語性もあつて、俳句は何と幅広く奥深い文学かと、楽しくなつてしまふ。あたたかくなつてついついとうとなる頃、鷹も鳩になるといふのである。

しかもこの句、獺まで登場して、さらに物語性が豊かに楽しくなる。心地良い気分の中で、つい幻想世界へ入りこんでしまった作者は、ちらと「獺らしきもの」まで見た。これも早春、獺が岸に魚を並べる「獺の祭」を連想させる。

「鷹鳩となる」といい「獺の祭」といい、私たちは豊かな幻想世界とその体験を昔はいつぱいもつていたのだが、いつの間にか喪つてしまった。この作者のように私たちも、幻想世界を取り戻すべく、この句のような楽しい作品と境地を試みなければならぬだろう。（中正）

大きな歳時記には「鷹化して鳩となる」という首題で載っているが、何とも長閑な春の雰囲気のある言葉である。『ホトトギス新歳時記』には採用されていないが、敢えて詠まれた作者に乾杯したい。句としてもまことに詩情の深い作品に仕上げられていて、歳時記の例句に成り得るだろう。（廣太郎）

天地有情

心子選

早春とつぶやき弾むこゝろあり 龍野 浅井青陽子

北窓を開き山居の園巡る 同 同

みよし野の花に引き来し祝心 京都 安原 葉

落花とびはじむ別れを惜むかに 同 同

この人出花は上野と言ふけれど 福岡 松尾緑富

旅鞆持ち重りして花の山 同 同

土筆よりこぼれしみどり卓の上 東京 今井千鶴子

みよし野の落花と共に舞ふ歩み 同 同

黄梅の色に弾かれある羽音 同 稲畑廣太郎

口尖るより冴返る話など 同 同

花冷や黄檗の膚朝日射す 樺原 稲岡 長

呑み下す花に別れといふ思ひ 同 同

少女らはあつけらかんと卒業す 神戸 山田弘子

東風波へ船出しさうな海ホテル 同 同

囀や箱根八里と今も言ふ 熱海 嶋田 一步

桃の花畑がつづき富士裾野 同 同

純白の花萼の香の萼かなし 同 嶋田摩耶子

鯉を呼ぶ掌を叩くときあたたかし 同 同

駒ヶ岳には冬帝眉山には冬日 徳島 上崎暮潮

しづかなる激しさもあり紅葉散る 同 同

一對の 県木 高く雪 囲 金沢 藤浦昭代

日矢共に連れゆく時雨雲速し 同 同

人生の 日々が 発見下 萌ゆる 豊中 瀧 青佳

初花の 平常心 に 迷なし 同 同

ひまはりの種のゴッホとゴーギャンと 神戸 後藤比奈夫

午後は憂し馬酔木の花も御仏も 同 同

太陽にしだるる薄紅梅なりし 京都 粟津松彩子

濃紅梅より濃き紅のなかりけり 同 同

南禅寺 界限にして 初音かな 姫路 桑田青虎

らんまんの花の散りくる憂ひあり 同 同

祝ぎ 近き 虚子 一門に 椿咲く 東京 吉田小幸

四代目を 雄々しく 継ぎぬ 梅椿 同 同

初日 仰ぎ 天地 有情て ふ 一語 福山 竹下陶子

去年 今年 大河の 如くありに けり 同 同

降り はじめ 止み はじめたる 春の 雨 八尾 岩垣子鹿

今日の 川 けふの 桜を 映し けり 同 同

天地有情句評

汀子

黄梅の色に弾かれぬる羽音 東京 稲畑廣太郎

黄梅の花の蜜に集ってくる昆虫の羽音を聞き逃さない作者の興味が想像される句。

呑み下す花に別れといふ思ひ 樺原 稲岡 長

花見という至福の時間は経ちやすい。もう別れなければならぬ時が迫ってきていることを知りながら、その言葉を呑み下す。

少女らはあつけらかんと卒業す 神戸 山田弘子

卒業という別れの悲しみを今の若者は明るくドライに迎えていることに驚く作者。

囀や箱根八里と今も言ふ 熱海 嶋田一步

箱根という天下の難所を越して行く箱根路は八里ある。自然の豊かな中を行くときの囀りを聞き感慨を覚える作者。

純白の花萼の香の萼かなし 熱海 嶋田摩耶子

花萼の白く可憐な花の姿には似つかわしくもないその匂いを嗅いでふと哀れに感じた作者の優しさ。(以下略)

早春とつぶやき弾むこゝろあり 龍野 浅井青陽子

頭脳の青春、心の青春、肉体の青春、その何れも最高の位置を保つために俳句を作り続けておられる作者の秘訣。

みよし野の花に引き来し祝心 京都 安原 葉

祝ぎごころを持ち続ける生涯の佳き日々にあることを作者は知っていて、それを大切に抱いている。

この人出花は上野と言ふけれど 福岡 松尾緑富

桜といえば上野の桜であると知っていて、訪ねたのである。さてその印象に人出が加わった。

土筆よりこぼれしみどり卓の上 東京 今井千鶴子

土筆を摘んで来て卓の上に置いた途端に緑の胞子が零れた。土筆を摘んできた現実を告げる見事な写生。